ており，地方の医療者にも参考となったものと思われる．

内容のなかで特にすばらしいと思ったのは，巻1にある平安時代の清少納言の書『枕草子』にある老人の引用である．『枕草子』は文学書として有名であるが，それだけではない．牛山からみると，老人の年の功の例が載っているのである．それは老人を捨てたり殺したりしていたある時代に，自分の70歳代の親を地下室に匿っていたある中将の話である．あるとき，唐の皇帝がわが国の知恵を試そうと2つの難問を出し，天皇も悩まれたというが，中将が親に聞いて解答しそれが正しかったので，日本はかしこい国であると悟ったという．中将は，褒美には官位ではなく隠されている老親を探し出し，都に住まわせてほしいと希望し許されたという．牛山は，老人は見聞が広く尊重すべきであることを知らなければならないとしている．『枕草子』を引いた牛山の日本の古典籍に関する教養の高さを知ることができる．

本書の翻刻・訳注を担当した中村節子氏は看護史研究会の主要なメンバーの一人で，助産師，看護教員，訪問看護師を経験されている看護職である．これまでに，江戸時代の平野重誠の『病家須知』をはじめ，『革谿医砭』『養生訣』『玉の卯槌』などを研究し，人物史，翻刻・訳注の研鑽を積まれている．しかし平野の著作には老人に関する記載が少なく，当時の老人はどのように処遇されていたのか関心を持ったという．また中村氏は牛山と同じ九州出身であり，高校時代から彼に関心を持っていた．

本書が医学・薬学・看護学の3分野の協働で出版の運びになったことには意義がある．これまで漢方史の領域に看護学が迫ることは少なかった．しかし3者混合の視点，すなわち，バランスのとれた医療史の視点でみえてくるものがあることを本書は示したのではないかと考える．今後の研究の新たな方向性ともいえるのではないだろうか．

牛山についていえば，彼の養生3書といわれる，『小児育草』『婦人寿草』『老人養草』が将来的にセットで出版されることを期待したい．

（平尾真智子）

［社団法人 農山漁村文化協会，〒107-866 東京都港区赤坂7-6-1，TEL. 03（3585）1141，2011年11月，A5判，208頁，1,500円＋税］

坂井建雄 編
『日本医学教育史』

卒前卒後医学教育の変化

日本の卒前医学教育は最近10年間に著しい変貌を遂げた．卒前卒後医学教育の標準化，教員主導型教育から自己開発型問題解決学習へ，学体系型知識重視教育から良医が備えるべき臨床能力・対人技能の質担保教育へ，など医学教育の主軸が大きく変わってきている．

教育に携わる人間も増えた．ほとんどの医学部に医学教育専任部署が設置され，医学教育専任の教員が任命されている．医学部教員ばかりでなく，市中病院の勤務医も学外実習で医学生の教育に携わるようになった．医学教育はもはや教授・准教授・講師・助教などの教員に限られた営みではなく，教育病院勤務医・看護師・薬剤師・検査技師などの医療関係者，更には一般人すらも模擬患者として学生教育や学生評価に関与する時代となった．

この度上梓された「日本医学教育史」は，医学史研究者はもちろんのこと，これら医学教育に関わる広範な人々にも，日本の医学教育がどのように展開してきたかを教えてくれる良書である．本書は，体系性を持った医学教育が始まった近世日本から，世界標準を念頭においた現代日本の医学教育に至るまでの変遷を，いくつかの断面から捉

えて詳述している．歴史的変遷を踏まえて，現在の日本の医学教育を見つめる「温故知新」のための貴重な資料と言えよう．

本書の構成

編者の「まえがき」に述べられているように，本書は医学教育とその歴史に詳しい11人の執筆者が幅広い観点から日本の医学教育の歴史を考察している．その中心をなすのは当然ながら時間軸に沿った歴史的経緯で，江戸時代の医育体制，明治期のドイツ医学教育の導入，明治・大正・昭和と近代国家体制が樹立されて行く中の医学教育，第二次世界大戦時の医師育成，戦後の米国型医学教育の導入，そしてグローバル化する医学医療の変化を反映する現在の医学教育に至るまでの歩みが丹念に考証されている．

本書では上記の時間軸を追う考察とは別に，いくつかの特色ある独立したテーマが取り上げられている．明治期の公立と私立の医学教育の対比，明治期の医学書の動向，戦時下の外地における医学教育，衛生思想から見た医学教育，日本における医学用語教育，医学博士の歴史などは，それぞれ断片的ではあるが深い考察に裏付けられて興味深い．女性医師に特化した項目立てがあれば更に良かったと思われる．

本書は編者の細やかな意図を反映して，日本の医学教育の歴史を体系的に網羅した点で，これまでに無い貴重な資料であり，今後も長く参照され続けることであろう．

「東京大学年報」に覆刻された「医学部年報」

私事にわたって恐縮であるが，東京女子医科大学に日本で初めて医学教育学教室が開設され，1995年筆者がその初代教授に就任した時，世界の教育先進諸国の追随模倣に終始せず，日本に適した医学教育プログラムを創出するには，少なくとも明治以後の近現代の医学教育の時代精神や，先人がどのように努力を積み上げたかという経緯を踏まえる必要があると感じた．時を同じくして1993～1994年に史料叢書東京大学史「東京大学年報」[1] 第1巻～第6巻が発刊されたことを知り，早速購入して東京医学校・東京大学医学部の「年報」，とりわけ「申報」の部分を拾い読みした．この資料の中で覆刻されている医学教育に特化した年報は「東京医学校年報（文部省年報収録分）」（明治6～9年），「東京大学医学部第四年報」（明治9年12～10年11月），「同第五年報」（明治10年12月～11年11月），「同第六年報」（明治11年12月～12年12月），「同第七年報」（明治12年12月～13年11月）があり，その後は「医科大学第一年報」（明治19年）へ飛び，「同第二年報」（明治20年），「同第三年報」（明治21年）と続き，「医科大学申報」（明治22年）で終わっている．

編者によれば，この刊行史料の中には初めて覆刻公開されたものも多く含まれているというが，筆者はいずれの部分が初公開であるかを未だ弁別していない．他に求め得ない史料であれば医史学・医学教育史研究者にとって貴重な存在であると思われるが，本書にはその引用がほとんどないことが惜しまれる．あるいは書名が東京大学全体に関わる集大成であったことと，すでに公開された部分が少なからず含まれているために，医学史研究者の目を引きつけなかったのかも知れない．

「申報」の有用性

わけても叢書東京大学史「東京大学年報」に現れる「申報」は興味深い．「申報」は馴染みのない表現であるが，すでに舊唐書憲宗紀に「令准式申報有司不得上聞」とある[2]．編者の一人中野実は，「さて申報であるが，その内容の豊富さに比べて，これまできわめて少ない研究論文で取り上げられているにすぎない」と指摘し，「申報は英語ではReportの訳語で間違いはなさそうである」と述べている[3]．幸い「日本医学教育史」の中でも，吉良が「東京大学医学部年報」に触れ（46ページ），「第四年報，第七年報だけに限られるが」と断って「ドイツ人医学教師申報の部分で，彼らの当時の教育の実態を知ることができる」と記していることは多としたい．実際には，覆刻された申報は明治9年の第四年報から明治22年「医科大学申報」まで連続し，外国教授申報抄訳・内国教授助教々員申報・内外教員申報・教員申報など

と名称を変えつつ，実際に教育に携わる個々の教員が自ら報告した医学教育の内容が年を追って生き生きと描出されている．医学教育史の数値的史料はもちろん重要であるが，医学教育の現実を伝える申報の情報が，この「日本医学教育史」にもっと多く盛り込まれたら，本書の意義は更に高まったのではないかと惜しまれる．今後「申報」の内容をも取入れた日本医学教育史研究が展開されることを期待したい．

文献

1）東京大学史史料研究会編：叢書東京大学史　東京大学年報（全6巻）．東京，東京大学出版会 1993–1994.
2）大槻文彦：大言海（第2巻）．東京，富山房，1933（昭8）；736.
3）中野実：解説　揺籃期の東京大学―年報及び教授申報の史料紹介を中心にして．東京大学史史料研究会編：東京大学年報（第1巻）1993；353–354.

（神津　忠彦）

［東北大学出版会，〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1，東北大学構内，TEL. 022（214）2777，2012年2月，A5判，374頁，3,600円＋税］